

令和5年度 「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる「共同利用型」の個人による研究 研究報告書

令和 6年 4月 16日現在

研究課題名	ポスト革命期ロシアにおけるルナチャルスキーの文化政策と舞台芸術	
申請者	氏名	所属機関・職
	伊藤 愉	明治大学文学部・専任准教授

研究成果の概要

本研究では、ポスト革命期ロシアにおけるソ連初代文相アナトリー・ルナチャルスキーの文化政策のありようを舞台芸術の側面から考察することを長期的な課題として設定した。ルナチャルスキーを中心として、演劇における文化政策はロシア革命後にどのように設定され（ていっ）たか、ゴーリキーと共に1919年に実施したメロドラマ・コンテストの記録を中心に調査した。コンクールが主催された背景には、ソ連期に入っても、各劇場のレパートリーは依然として革命前の古い劇作が大半を占めていたという状況があった。1917年のロシア革命を経て、新しい社会が建設され、新しい観客にふさわしい戯曲が求められていたにもかかわらず、その当時の劇場で上演されていた作品は、その要請に答える内容を備えていなかった。旧社会の戯曲と革命後の新しい社会の不一致という状況は、たしかに古い戯曲に新しい解釈をもたらす演出手法の発展を促しもした。しかし、前衛的な演出家による古典作品の大幅な改作は、ソ連の演劇界に摩擦を生み出してもいた。こうした戯曲の不足への方策としてメロドラマ・コンクールはひとまず位置付けられる。

その一方で、戯曲の不足という状況から生まれたコンクールがゴーリキーとルナチャルスキーによるメロドラマ・コンクールではなかった点も注意しておく必要がある。1918年から1921年までの間に、メロドラマ・コンクール以外に少なくとも三十二の戯曲コンクールが実施されている。

こうした事実を踏まえると、時代に要請されてある種の自然発生的にメロドラマのモードが生まれていたというよりは、新しい社会にこたえるソヴィエトの戯曲が必要とされており、その一つとしてルナチャルスキーやゴーリキーがメロドラマの形式を人工的に作り出そうとしていた、という方が正確だろう。また、メロドラマ・コンクールの審査員には、ペテルブルグのポリショイ・ドラマ劇場の関係者が数多く関わっている。同劇場は、革命前の美学的文脈を備えた人物らが結集した劇場であり、19世紀的な文化からの脱却を目指してはいたものの、その時代においては「保守派」の劇場と位置付けられる。メロドラマ・コンクールは、どうやらこの劇場のレパートリーを作り出す目的もあったことが文献調査により明らかになった。

主な発表論文等（雑誌論文、学会発表、図書 等）※謝辞の有無について明記願います。

【MISC】伊藤愉「(書評) 岩田貴著『現代ロシア演劇—ソ連邦崩壊からパンデミックとウクライナ侵攻まで』『ロシア語ロシア文学研究』2023年55巻、215-225頁（謝辞無）

【翻訳】グリゴリー・ガウズネル『見知らぬ日本』伊藤愉訳、共和国、2023年7月（謝辞無）

当該研究活動をもとに採択された研究プロジェクト（応募中の研究プロジェクトを含む）

なし